

学校 / 大学

「バリヤドリード大学キャンパス」

設計=ホセ・イグナシオ・リナサソロ+リカルド・サンチェス・ゴンザレス

大学の使命に捧げる都市建築

フェデリコ・ブッチ、ルカ・カルダーニ

参照 | 本誌pp.4-21

時間を引きずりながら、光がわずかに屈曲する。

マリア・サンブラノ『森の明かり』、1977年

グアダラマ山脈の麓に広がるメセタ(中央高地)に囲まれたセゴビアは、マドリードから100キロ未満の距離にあって、その優美な歴史を誇り高く見せている。都市の心臓が鼓動を打つアソゲホ広場では、城壁の足元に連なる街並みを、古代ローマ時代の力強い水道橋が横切っている。頭上高くを見上げると、2層のアーケードが空を背景に浮かび上がる。何世代もの建築家たちが、この「地理学的事実」を巡るアルド・ロッシの記述を記憶している。彼の多くの文章やスケッチに執拗に表れる説明では、都市構造を秩序付ける持続的なものと定義された。

時間のなかの建築の持続性と、都市分析手段としてのタイポロジーの多様性について、ホセ・イグナシオ・リナサソロもその建築家かつ建築教師としてのキャリアを通じて論じている。リナサソロは、セゴビアに実現され、この地

で幼少期を過ごした哲学者マリア・サンブラノ(1904-91)に捧げられたバリヤドリード大学新キャンパスの設計競技に勝利した建築家だ。これは19世紀に織物工場が建てられ、その後は兵営になっていた巨大なブロックの再開発計画である。「パティオ・デル・ラガルト」の名で人々に知られている大空間を核とする、中庭式の構成である。このエリアは今日、旧市街とグアダラマ山地に続く農村地帯の拡大都市圏との間で、戦略的な都市拡張政策に向かっている。リナサソロとサンチェスの連名による実施設計は、2期に分けて実現された。第1期は2011年に、第2期は2019年に完成した。

新キャンパスには、教室と事務室の空間が作る縁によって兵舎の周壁が残された。その内側に図書館とイベントホールが置かれた。こうして、大学と結び付く2つの性格が同時に展開する。まず市民的施設としては、立地環境と連絡する建物のスクリーンによって、目を引く都市の一部として造形された。しかしながら、知識の交換に開かれた公共機関としては、大きな集合的屋内空間のシステムによって、周壁に規則正しく設けられた休止符を通じてアクセスできるようになった。第1期工事では、直線的なブロックに断片化された中庭式建物によって、こうした関係が具体化された。三面で大きな屋内広場を閉じ、その背後は新たに完成したエリアに開いている。

この屋内広場は設計競技の要綱では要求されていな

かったが、建築家らの直感が実を結んだ。「パティオ・デル・ラガルト」の記憶を取り戻すことによって、彼らは学生、教員、そして市民に奉仕する新しい空間をデザインした。ここに置かれた図書館は、地下に掘り下げた部分と、空中に浮かぶ3本の巨大な塔で構成される。書物の塔は凝った木材パネルで覆われ、鉄筋コンクリートのフレームの内側に吊られた。

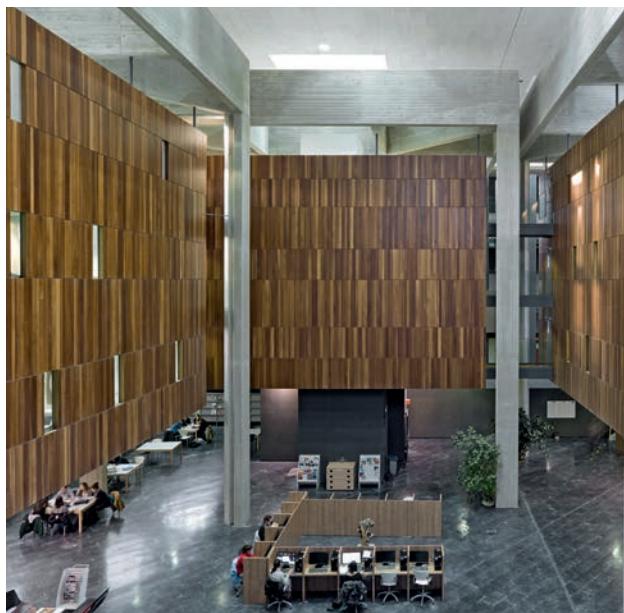
キャンパスを2つに分けるのが、細長い中庭広場だ。このヴォイドを挟んで、よく似た構成の2つのファサードが鏡像のように向かい合う。広場が2つの建物の間を行き来する時の闇となる。この屋外スペースは、キャンパス全体を縦貫する軸に沿って延びる連続した通路に設けられた、最初の休止部だ。この縦軸が、1本の「建築的プロムナード」によって2つの部分を結び付ける。長手方向の断面図を見ると、キャンパスの奥深くに入り込む通路の意味が理解できる。キャンパスは、大きなヴォリュームの間に置かれた垂直のヴォイドの連続で区切られており、そこから入る光によって、内部の多様な用途が明らかにされる。

屋内広場を横切り、2つのブロックが向かい合う中庭広場を過ぎた後、エントランスの回転ドアをくぐると、トップライトの光で照らされたアトリウムに入る。そこに置かれた巨大な木製の宝箱には、「サロン・デ・アクス」が収められている。

地表から持ち上げられた、この閉じて謎めいたヴォ



第1期:図書館棟ファサード



図書館:屋内広場



図書館:最上階の閲覧室



中庭広場:左に図書館棟、右にイベント・ホール棟を見る

図書館棟:第2期工事前に撮影した夜景

「サンドフォード・パーク・スクール」

設計=オドネル+トゥオメイ

現在完了進行形:サンフォード・パーク・スクールの

「ル・ペトン・ビルディング」

ベン・マレン

参照 | 本誌 pp.22-31

アルフレッド・ル・ペトンは、ハシバミの林を散歩しようと外に出た。頭が燃えそうだったからだ。(……)彼の学校(そこには短期間だが若きサミュエル・ベケットも通っていた)を、ダブリン中心部の騒がしいアールスフォート・テラスから遠くに移転させようと考えていた。そのために、ヴィクトリア朝期に成立した緑あふれる郊外のランラー(ダブリン6区)に、2ヘクタール半の庭園がついたネオ・チューダー様式の瀟洒な邸宅を購入していた。1922年9月に、サンドフォード・パーク・スクールの扉が53人の生徒のために開かれ、当時のアイルランドにとって、無宗教の、非常に革新的な教育モデルを提供した。今日、「ル・ペトン」は、オドネル+トゥオメイ建築設計事務所(ODT)が完成させて間もない、じつに優美な学校建築の名称となっている。

大学キャンパスのような雰囲気を創るという目的に向けて、ODTは数段階に分かれたマスタープランを提案

した。そこでは第1期に2つの運動場の再編、第2期にスペクタクル芸術に特化したパヴィリオンの増築が計画された。第1期の建築設計スキームでは、敷地の北端に沿って走る緩やかな坂道の、舞台装置のような頂点として新校舎を捉えている。校舎はほとんど道路の延長のようになり、農村建築に似た、木と煉瓦の長く低い建物として読むことができるだろう。公園というテーマを魅力的に再解釈した結果、隣接する運動場が描く新しい輪郭を威儀をもって見渡している。

まず最初は、建物の魔法がすべて内部に閉じ込められているように思われるが、すぐに開示され、コンテクストの深く知的な分析が明らかになる。それによって元来の建物(1894年建設)の「アーツ・アンド・クラフツ」的モチーフがじつに巧みに再計算され、野心的なプログラム——10の新教室、3つの会議室、予備的エリア、設備などを効果的に満たすことができた。

新校舎に近づくと、半分に割られた三角形のティンパヌムが最初に目に飛び込んでくる。錆色の煉瓦の帯の一部が突き出て表面に動きが生まれ、小さな基壇の上にまるで切妻屋根のように載っている。左端には硬材による張出し窓の側面が、煉瓦の柔らかな外壁から突き出ている。その上端は、排水溝を備えた楣式構造に似た、奥行きのある軒蛇腹で閉じられている。これらの要



エントランス側ファサード

素全体でダイナミックな構成が作り出され、建物本体から視線を逸らして重要な軸線の移動に導く。これは設計が進むにつれ何度も繰り返されることとなった。これほど不規則なファサードは学校建築には普通見られないが、このキャンパスの特別な図像学的記号となって、ぽんやりと校舎を歩く学生たちのためのオリエンテーションとして機能する。

内部には見るべきものが多い。漆を塗ったイロコ材のつやつやした壁の下にあるエントランスを入ると、すぐに長く幅広い通路が見える。開口部からたっぷりと射し込む光が何か特別なものを予期させる。屋外通路に敷かれた鮮やかな赤色の砂利から、今度は明るいコンクリートの床に変わる。川砂利と、校章と同じ緑色をしたコネマラ産大理石の砂粒を特別に混ぜてある。未加工の壁面がつくる色味——カバノキの合板から南洋材まで——のなかで、物質性は最大限直接的に作用する。教育技能省が用いる使い古されたレパートリーとは光年もの差がある。最初に2分できる連結教室が位置し、その前に中心となる場面が現れる。ロッカーが据えられた2層吹き抜けの空間だ。ここで、先ほど見たティンパヌムのイメージがエックス線写真のように再び現れ、構造の空間的クオリティが前面に出てくる。天井にはダグラスモミの板が縦軸方向に並ぶ。骨組と断面がリズミカルに交替しひとつのボリュームの様相を帯びる。L字型の階段を降りていくと段板が横幅いっぱいに広がって、上にも下にも周囲を見晴らすよう——社会生活を営むうえで重要だ——眺めが得られる。この空間は階段式劇場としても、スペクタクルや集会を催すホールとしても機能する。要するに、ヘルマン・ヘルツベルハーグが公立学校の設計案で初めて実験した、あのいつも陽気な空間のひとつである。

他の教室にも、ある有名な建築的工夫が見られる。そ



運動場より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan

リユースの方法

「旧モルト工場の再利用」設計=プラクシス・アルキテクター

改良する/結び付ける/つなぎ止める

マッショ・クルツィ

参照 | 本誌pp.32-43

デンマークの建築設計事務所プラクシス・アルキテクターの近作をとりあげるのは、われわれにとってじつに興味深い。なぜなら、使われなくなった大規模建築が、いかにして知的な設計案と開明的な建築主を通して、デンマークのとある小都市に前向きなエネルギーを生成し発散させる重要な要素になったかを議論できるからだ。デン

マーク中東部、オーフス北東の入り江が連なる沿岸にあるエーベルトフトは、古い港町で、旧市街は砂利を敷いた小路や、木材とプラスターのハーフ・ティンバー様式の家々が特徴的だ。地理的位置とオーフスとの近さ、とりわけオーフスの空港までわずか15キロという立地を生かして、近年は重要な観光地帯に変わった。「別荘」の著しい増加によって、夏もそれ以外の季節も、国勢調査で公式に登録された住民数よりはるかに多い人々が暮らすようになった。エーベルトフトには多様な文化施設が置かれている。最も重要なのが、1985年にアーティストのフィン・リンガードとチャイ・ムンクが設立したガラス美術館である。世界で初めてガラス加工技術に特化したミュージ

アムだ。今回取り上げる大規模な生産施設は鮮やかな色彩で知られていたが、数年前に近代的なショッピングモールに土地を明け渡すため取り壊しを迫られた。1861年の建設以来、S・B・ルンドベリが創業した工場はデンマークで最重要の、また世界でも有数のモルト生産工場だった。1998年にモルト生産が終了し、建物は放棄された。幸運にも、啓蒙的で夢想的な人々が集まって旧工場に社会的、文化的潜在力を見て取り、イニシアチブを始動した。彼らは短期間で十分な資金を集め、モルト工場全体を購入した。シドユルス市当局の緊密な参画によって、この夢を現実に変えることができた。プロジェクトは立ち上げ当初から、構造的な特質、再生材からなる多彩な全体像、地域的な規模などの建築的観点から非常に興味深かった。まさにそうした理由から、設計競技が発表されると世界各地から計29グループという多くの建築設計事務所が参加した。メテ・トニがマツ・ビヨルン・ハンセンと設立したデンマークのプラクシス・アルキテクター（参照：『CASABELLA』902号[2019]、906号[2020]）が、設計競技に勝利した。彼らはすぐさま効果的なアプローチを示し、複雑な建築体系に慎ましく無駄のないプロファイルをもった偉大な性格を与えられる、適確な解を提案した。工場の屋内面積は3,400m²で、当初市が所有していた1,000m²の土地とあわせて、図書館と美術館に生まれ変わった。約17,644m²の屋外空間の一部はモルト工場の敷地で、一部は市が所有する。

プロジェクトの主目的は、3つのマクロなテーマに合わせ戦略的に機動することだった。すなわち、新しい機能の導入に合わせて既存建築の空間性と規模を最適化すること、部分どうしの垂直・水平の連絡を向上させること、そして最後のおそらく最重要のテーマが、新しい多目的センターを周囲の社会的、地域的コンテクストに根付かせることだ。1つめのテーマは、新しい機能の導入に基づいて既存建物の空間性とプロポーションを最適化すること。ボリュームと連動した屋内の空間性に手を加え、既存の構造を荷重から解放して新機能をより効率的に組み入れる作業となった。2つめでは、設計の各所で屋内、屋外を問わず動線の合理化が図られた。3つめのテーマでは、物理的な連絡路を用いて、新しい複合建築の存在をエーベルトフトの文化的コンテクストにできる限り結び付けることが模索された。例えば、「軽い」通路を西に行けばこの施設、東に行けばアデルガーデ市場



海沿いの道路より見る

「ロスキレ・フェスティバル民衆大学」

設計=COBE+MVRDV

非公式な教育空間の2つのスケール

フランチェスカ・セツラザネットティ

参照 | 本誌pp.44-53



ムジコンは、デンマークのロスキレ市郊外にある旧工場地帯だ。旧市街の南、田園地帯が始まる手前に広がる45,000m²の土地で、その野原には毎年夏になるとヨーロッパで最大規模の重要な音楽フェスのステージが設営される。当地は長年、ここに本社とコンクリート生産施設を置いたウニコン社の工場に占められていたが、2003年にロスキレ市が買い取ると、クリエイティブ産業と知識産業を基盤とするダイナミックで非公式な刷新プロセスの基点になった。ミュージシャン、スケーター、アーティスト、小規模クリエイティブ企業が空っぽの建物に住み着き始めた一方、徐々に再開発のイニシアチブとプロジェクトが具体化していった。ボトムアップで生まれた個別のアクショ

ンと並んで、この地区に根付いた自然発生的な活力を重んじながら大規模再開発が進められた。このコンバージョンの方向づけには、1971年の創設以来、音楽を同市のアイデンティティと魅力を決める要素に変えたロスキレ・フェスティバルの存在も寄与した。ロスキレ・フェスティバルを軸に、時代とともに特別な共同体的側面が強化され、連帯とサステイナビリティの諸政策に配慮した活発な社会性が育まれた(財団によって運営されるフェスティバルは、毎年3万人のボランティアが参加して実施され、収益は年によって異なる理由で選ばれた慈善活動に寄付される)。

ウニコンからムジコンへの改変を目的として2011年に国際設計競技が開かれ、COBEとMVRDVのチームが

優勝した。設計プログラムでは8,000m²の工場群を増改築し、ロックマグネテンを実現することが計画された。これは広く創造的な共同体に向けた文化、教育、社会の各事業の中核施設である(活動の中心となるポップ・ロック音楽博物館のラグナロック[設計:MVRDV]は2016年に落成した)。流动的で、力強く、多孔質の空間を建設することは、ロスキレ・フェスティバルがエリア内に実現を要望した民衆大学(デンマーク語でホイスコール)の設計案の前提条件でもあった。

「民衆の高等学校」は組織として非公式な性質をもつ。現にこれは、19世紀前半にデンマークの哲学者・聖職者・知識人であるN·F·S·グリュントヴィの思想から開花した、非公式の成人教育の概念に基づいている。北



中央スペース: 左に「オレンジ・ボックス」を見る



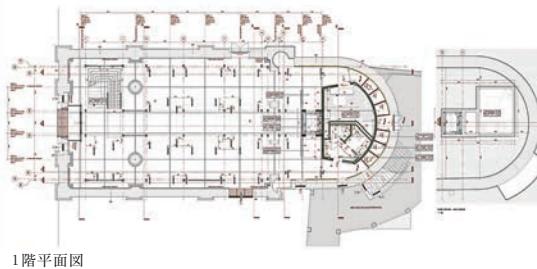
中央スペース

「カ・スカルパ」設計=トビア・スカルパ

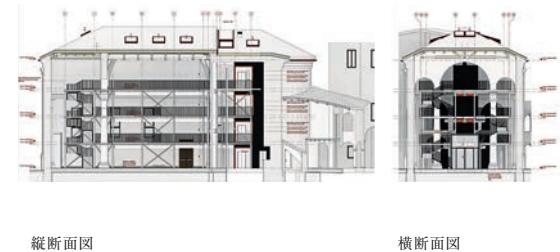
トレビーゾのカ・スカルパ:
ベネトンが委託する文化のための場所と都市
ルイジ・ラティーニ

参照 | 本誌pp.54-73

再開発計画が進行中の、旧トレビーゾ財政監督局の複雑な建物群の中で、サンタ・マリア・ノーヴァ教会のコンバージョンが最初に完了し、「カ・スカルパ」の名称でオープンした。この名称は、スカルパ親子に関わりの深い——ベネトン財団の傘下における——本質にまつわる活動の、展示の場であり活気ある拠点として機能するという意図を宣言している。つまりこれはミュージアムではない。建築にとどまらず、トレビーゾの風景が辿った歴史や場所——第30回カルロ・スカルパ庭園賞の経緯を思い出してほしい——と結び付いたこの2人が残した文化的な遺産と刺激を、第1の参照源とする開かれた場所



1階平面図



縦断面図

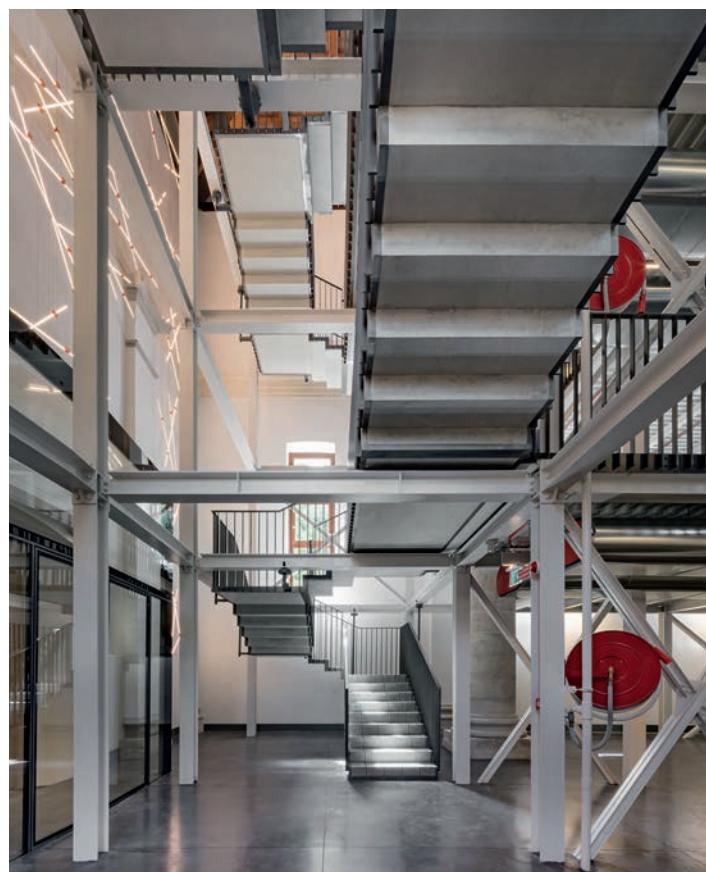
横断面図

だ。都市を見つめ、またカルロとトビア・スカルパが国際的に体现する文化的な呼びかけにも耳を傾ける。

都市構造における配置自体が、かつて教会だったこの建物が都市に対して果たす結節点の役割を明示し、またトレビーゾにおけるベネトンの建築事業の広いネットワークを表す多様な場所を伝えている。旧教会の建物は都市ブロックの外縁(カノーヴァ通り)に位置するが、ブロックの反対側では、ハプスブルク支配期の裁判所と監獄の修復がすでに終り(現在は監獄美術館)、今は回廊と中庭の驚くような連続によって都市的用途に付され、公的に認知されている。他方で、サンタ・マリア・ノーヴァ

はその再発見された存在によって、灌漑用水路(シレット運河)の見え隠れする流れを知らせる。この水路には、遍く存在する、再生され文化施設に生まれ変わった建物の記憶が集まっている。特に思い出してほしいのは、山側の、水路に面した庭のあるポンベン邸やカオトルタ邸の連なり(現在はベネトン学術調査財団の本部)、水路沿いの監獄美術館、そして一番遠いサン・テオニスト教会(『CASABELLA』881号、2018)である。すべての建物が、トビア・スカルパの存在とルチアーノ・ベネトンの委嘱を経験している。そこで、サンタ・マリア・ノーヴァが信仰の場所から正真正銘の「倉庫」に転身を遂げた歴史を読み返すと面白い。当初は19世紀の建物、その後は20世紀の建物に変わった。立地環境は、修道院施設のほとんど迷宮のような構成で、修道院と教会が廃止されると、軍隊生活に合うよう病院や兵舎に改築された。戦争によって何度も損害と破壊を受けた後、最終的に、財務局に関わる書類と空間に全体が占拠された。教会は2世紀の間、手を加えられることなく倉庫としての使命を果たし、現在は都市の公的活動に向き合う旧財務監督局の総合施設における主要建物となっていた。スカルパの設計のおかげで、保存の場としてよりも、むしろ一時的な保管所という確固とした職務を隠すこともない。今ある建物は16世紀後半にできたもので、この地で最古のベネディクト会系オーニッサンティ修道院とサンタ・マリア・ノーヴァ修道院および付属教会が統合された、広大な敷地に建っている。これらはすべて、ナポレオン時代に修道会の廃止に遭い、まず軍病院となり、のちに兵営になった。

教会はさまざまな機能的適合工事を施され、床スラブと内部のパーテーションが建設された。イタリア王国の成立とともに兵営になつても造作はそのまで、2つの世界大戦中の爆撃でも損傷がなかった。戦後になって、荒廃の中から生まれたのが財政監督局への改築計画で、その後1980年代に、19世紀から20世紀の増築部が取り



1階内部:階段方向を見る



1階内部:エントランス方向を見る



階段室

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 Architects Studio Japan